学園都市ツェルニ

無気力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園都市ツェルニ

【Ｎコード】
Ｎ８４９１Ｍ

【作者名】
無気力

【あらすじ】
学園都市ツェルニでのレイフォン達を描いた「鋼殻のレギオス」の二次創作。　数話で構成される短編を連ねる形で描くレイフォンを中心とするヒロインの動き。　恋愛やドタバタが主な成分で、戦闘やシリアスはあまり出てこない・・・と思います。

デイリー・ライフ　1（前書き）

いきおいで書き始めた話ですが、楽しく読んでいただければ幸いです。

デイリー・ライフ　1

大気と土に充満する汚染物質によって、大地は実りを失い、地上は人の住めない世界となった。荒れ果てた大地には、汚染獣と呼ばれる異形の生物が闊歩し、人々の平穏を脅かしていた。

人類が生きていける場所はただひとつ。

自立型移動都市（レギオス）――――意思を持ち、自らの足で歩く都市の中でのみ、人々は生存を許された。

荒野の中、いくつもの都市が絶えず動き続ける世界。

「レイフォン！何をボーっとしている。訓練中だぞ、気を抜くな！」

「あ、すいません」

謝りながらも、レイフォンはいまいち気分が乗らない。　入学当初ほど武芸を嫌っている訳ではない。今では、ニーナ初めとする十七小隊の人、メイシェンたち。そんな、グレンダンとは少し違う、守りたいものができてきた様な気がする。そのためになら、この力を少しくらい使ってもいいかなと思う自分も居る。

それでも、何故か気分が乗らないのだ。

「レイフォン、何をしている！訓練中に気を抜くなと言ったばかり

だろう」

「あ、すみません・・・」

「どうした、調子が悪いのか？」

「いや、そういうわけじゃないんですけど」

「なら気を引き締めろ！」

「はぁ・・・」

気が乗らない理由が分かった。単純に眠いのだ。昨日は機関掃除のバイトがあったため、あまり眠れていない。レイフォンほどの実力者になれば、それこそ不眠不休で1～2週間は戦い続けることが出来るだろう。しかし、気を抜いている学園生活での寝不足は素直にキツイ。

ちなみに、レイフォンたちが今行っている訓練は、錬武館でのニーナとの組み手だ。ただ、レイフォンが強すぎ、普通に組み手をしても意味が無いので「5分の間でニーナが何回レイフォンに攻撃を当てる事ができるか。レイフォンは攻撃禁止」というルールで組み手をしている。

すでに3セット目だが、ニーナはいまだにレイフォンに有効打と呼べるものは一撃も当てていない。一応、レイフォンも、防御の為の活剄と衝剄は許されているから、ニーナの放つ衝剄を弾き、活剄を使って移動速度を上げている。

「5分経ちました」

凛と、宝石製のハープを弾いたような透き通った声が時間切れを告げる。十七小隊所属の念威操者、フェリ・ロスだ。

「む、また何も出来ないまま終わってしまったか」

「いえ、隊長の動き。初めに比べて随分良くなりましたよ」

「そうか！？本当にそう思うか？お前が言うなら間違いないな。私も強くなってきているということか」

喜々として、休憩に入るニーナを見てレイフォンは思う。

はっきり言えば、ニーナはまだ隙だらけだ。ニーナは、活剄を常に全身におこなっている。別にそれでも良いのだが、攻撃する部位、防御する部位にあわせて活剄を変化させていけばもっと、攻撃は早く強力に、防御は厚く確実になる。

そんな事を考えながら、自身の青石錬金鋼（サファイアダイト）を復元し、型の練習をする。

（ずいぶんと楽しそうですね）

突然、耳元でフェリの声が聞こえた。見れば、フェリの念威端子が淡い燐光を放ちながら顔の横に浮かんでいる。

「そう見えますか？」

（そう見えます）

「・・・・・・」

（訓練が終わったらわたしの部屋に来てください）

「生徒会長から、ですか？」

ニーナの様子を見ながら聞き返す。もし生徒会長が直々にレイフォンを呼び出したのだとすれば、それは汚染獣に関係のある話になるかもしれない。もしそうなら、ニーナに聞かせるわけにはいかない。レイフォンが呼ばれるという事は幼生体の大群かそれ以上、つまり雄性体か老生体だ。そもそも、レイフォンでないと倒せないからこそレイフォンが呼ばれる。そんな戦いに学生武芸者が来ても邪魔か足手まといにしかならない。

（いえ、今回はわたしの私情であって、兄は関係ありません）

レイフォンは、生徒会長が関わっていないと知って密かに胸を撫で下ろす。なにせ、あの人が関わったことでよかったことなど一つもない。

「なんだ二人共。話なら直接すればいいじゃないか」

いきなりニーナが会話に割って入って来た。

「隊長には聞かれたくありませんので」

フェリが断固とした拒絶を表す。

「む・・・」

「では、訓練が終わったらわたしの部屋に来てくださいね」

「なっ！！！」

ニーナが何故か絶句する。

「レイフォンがフェリの部屋に行くだと！？」

「ええ。何か問題でも？」

「うぅ・・・問題は、ない・・・のか・・・？」

「そういうことですので、わたしは一足先に帰って準備をしておきます」

・・・・・・。

・・・・・・・・・。

何となく気まずい空気が漂う。

それにしても何でフェリ先輩はわざと隊長に聞こえるように言ったんだろ？別に知られても良いなら念威なんて使わなくてもいいと思うけど・・・。

レイフォンは気まずい空気を払拭するため、４秒間だけ、グレンダンでしていたのと同じレベルの動きをすることにした。何故４秒かというと、それはレイフォンの本気に、錬金鋼（ダイト）のみならず錬武館までが耐えられない可能性があるからだ。

４秒の間。錬武館の十七小隊にあてがわれた空間は、嵐にみまわれた。

案の定、終わった後に青石錬金鋼（サファイアダイト）を見てみると、細いヒビが入っていた。

（またハーレイ先輩に直してもらわないと・・・）

「レイフォン。私と、真剣勝負をしてくれ」

突然ニーナがそんな事を言った。

「既に分かってはいたことだが、先ほどの事を見せられては、私とお前の力量の差は火を見るより明らかだ。しかし、そんな物凄い力を持つ者に対して私はどこまで立ち向かえる？突然そんな事を思ってしまった。面倒かもしれないがコレが最初で最後だと思って頼みを聞いてくれ。あんなものを見せたお前が悪いんだ」

「え？真剣勝負って、全力でですか？」

「当然だろう。それと、剄技も錬金鋼（ダイト）も使っていいぞ。そうでなければ全力とは言いがたいからな」

「いやその、僕の錬金鋼（ダイト）、ヒビが入っちゃって・・・」

とにかく言い訳を考える。

「それなら心配しなくても良い。ココに簡易模擬刀が幾つかあるからな。好きなのを選べ」

退路が絶たれた。ニーナは、むしろサッパリとした様子でレイフォンに箱を渡す。

「はぁ・・・」

レイフォンは逃げる算段を考え、直ぐに却下する。どうせ逃げても、また明日、また明日と、延期されるだけだろう。それなら今終わらせるほうが楽だ。

レイフォンは箱から一つを選んで復元する。それは白金錬金鋼（プラチナダイト）の剣だった。白金錬金鋼（プラチナダイト）は耐久性や粘度にやや難があるが、別に武器にそこまで剄を注がなければ良いだけの事だ。

「いいですよ。最後に聞きますけど、本当に全力でやってもいいんですね？」

「くどいぞ、レイフォン。あの時計で7分になったらソレが開始の合図だ」

ニーナの指すほうを見ると、後１３秒で7分になる。レイフォンは瞬時に活剄の密度を跳ね上げる。陛下が暇だという理由で天剣一人一人と都市外で戦った時、老生態を相手にした時と同じくらいまで肉体を強化する。そのあまりの剄の密度と量に、ニーナは目を見開いたが、それもすぐに笑みに変わる。

後２秒。

後１秒。

7分になった瞬間レイフォンは動いた。室内が閃光で埋め尽くさ

れる。その閃光が晴れたとき、ニーナは壁に押し当てられ、首筋に剣の切っ先を突きつけられていた。

「負け、たのか・・・」

「はい」

ニーナはしばし呆然としていた。

「何がどうなった？何故身体が思うように動かないんだ？」

「それは徹し剄のせいです。あの技は、威力を調節すれば相手の身体を内側から麻痺させる事ができるんですよ」

「本気で放っていれば？」

「隊長の身体は人間の形を留めていません」

「は、はは。恐ろしいな・・・。ちなみに今の、全力ではなかっただろ。徹し剄の威力を調節するほどだからな。お前が最も本気で戦った時と比べて、今のはどれくらいなんだ？」

「１０分の１も出していません」

素直に答える事にした。レイフォンはあえて、傲慢な態度をとる。ニーナは、そりゃ負ければ落ち込むだろうし悩みもするだろうが、それを糧にして更に飛躍できる人間だからだ。

「１０分の１も、か・・・。私は少し疲れた。レイフォン、フェリが待っているんだろう。お前も帰っていいぞ」

「分かりました」

レイフォンは何も言わずに錬武館を後にする。

頭を切り替えて、この後の事を考える。

シャワー浴びて、私服に着替えてから行くとすると、大体１２～３分くらいかかるかな？それにしてもフェリが個人的な事で呼び出すなんて。どういうことだろう？

そこでフッとニーナの事が頭をよぎった。だが心配はしていない。明日になれば、自分の中で答えを見つけていつも通りのニーナに戻ると信じているからだ。

フェリを怒らせるのは怖いので、レイフォンは走って帰ることにした。

デイリー・ライフ　1（後書き）

いや、どうやって終わらせるかきめてねーよ。
うん。どうしようか？
勢いで書き始めた話なので、もしかしたらネタ切れするかも。
ってことで、その時は皆さんに、
○○×○○でカップリング書いて！
などのご意見を求めるかもしれませんのでどうぞよろしく。短編（番外編）扱いになるかストーリーに食い込むかどうかは筆者しだい
＾＾
なお、厚かましいかもしれませんが、大まかでいいので話の流れを添えてくれると在り難いです。
ちなみに、この先どうするかも決めていないので、上に記したようなことを感想として送ってもらえると、それがある程度話に反映されると思います。

デイリー・ライフ　2（前書き）

フェリの話にはいかず、ニーナ目線で第一話を振り返ります。

前回よりも長いです。

余談、レウの髪の色は青色なんだよ。

デイリー・ライフ　2

「うかつだった。まさか寝過ごしてしまうとはな・・・」

「ホント。セリナさんのあの目覚ましはもう二度と聞きたくなかったのに」

「すまないレウ。わたしのせいであんなことに・・・」

ニーナの、「あんなこと」の台詞で二人は今朝の事を思い出す。

今日はめずらしくニーナが寝過ごした。そこで、寮長であるセリナがニーナを起こす為に悪魔の兵器を持ち出したのだ。

「まったく、セリナさんは確かに錬金科だけど、どうやったら調理器具が兵器になるのよ」

ニーナの脳裏に、おたまとフライパンを持って嬉しそうにうねうね動くセリナの姿が浮かぶ。

「もう、ニーナちゃんはお寝坊さんなんだからー」

幻聴まで聞こえる。

「そんなニーナちゃんの為に特製の栄養ドリンクを作っちゃったんだよー」

いや、これは幻聴ではない。その証拠に隣を歩くレウの顔もやや

引きつっている。

「はいどーぞ。あとで感想ちょーだいね」

どこからともなく現れたセリナが、小さな小瓶をニーナに渡す。それも2つもだ。

「セリナさん。わたしは1つでいいというか、1つもいらないというか、何故2つなんです？」

「んもう、分かってるくせにー。ニーナちゃんったら照れちゃって可愛い～」

「何のことですか・・・」

「彼のことよ。十七小隊のエースくん。訓練で疲れるでしょ、その時にニーナちゃんがこれを渡せばポイントアップ間違いなし！」

「なっ！」

「そ、それじゃ、ニーナ。また後で」

レウが我関せず、といった顔で走り去っていく。

「ふふふ、ニーナちゃん。二人っきりだねー」

「そ、そうですね」

「レウ、恨むからな」

「そんなこと言わないでよ」

授業を順調に消化していき、昼休憩でのニーナとレウの会話。

「でもセリナさんのいう事にも一理あると思うよ」

「なにがだ？」

「だから、いつまでもそんな態度をとってるとその内後悔することになるかも、ってこと」

「意味が分からないぞ」

「まぁまぁ、そんなことよりセリナさんが作った栄養ドリンク。どうするの？」

「うーん・・・」

ニーナはスポーツバッグの中から小瓶を２つ取り出す。

「いっそのこと、セリナさんの言うとおりに彼にあげたら？」

「そ、それは・・・いいのかな？」

「いいに決まってるじゃない」

「だがしかし、なぁ・・・」

「ホントに後悔することになるかもよ」

ニーナは錬武館に向けて走っていた。頭の中ではレウやセリナの言っていた事がぐるぐる回っている。

『訓練で疲れるでしょ、その時にニーナちゃんがこれを渡せばポイントアップ間違いなし！』

『いつまでもそんな態度をとってるとその内後悔することになるかも、ってこと』

止まって、バッグを開ける。そして、２つある小瓶を見て頬が緩む。

「なにをしているんだわたしは！あいつは部下で仲間。それ以上でもそれ以下でもない！」

自分に言い聞かせるように言ってからまた走り出す。

錬武館に付く頃には小瓶のことは頭にはなく、集まりの悪いメンバーのことや訓練メニューのことを考えていた。錬武館の扉を開けるまでは、だ。

「あれ、隊長」

「れ、レイフォン！？はは、早いな」

「はい、今日は授業が早く終わったんで」

レイフォンに会った瞬間、ニーナはバッグにある小瓶の事を思い出す。

「訓練着に着替えてくる」

踵を返して、ニーナはロッカールームへ行く。

（何を動揺しているんだわたしは）

ロッカールームで訓練着に着替えると、スポーツバッグの中から必要な物を取り出す。とそこで小瓶を見つけて手が止まる。持って行けばいいのか持って行かないほうがいいのか・・・。

（ええい迷うな！いくらセリナさんの作った物でも栄養ドリンクに変わりは無い）

ニーナは小瓶を2つ取り出すとロッカールームを出た。

錬武館に戻ってみると、いつも最後にくるフェリが来ていてレイフォンと話していた。

その光景を見て胸が少し締め付けられる。

（もしかして・・・）

わたしはレイフォンの事が好――。

「どうしたんですか？ボーっとして」

「いや、なんでもない」

訓練に入った。シャーニッドは来ないらしい。

「それで、隊長。今日はなんの訓練をするんですか？いつもみたいに連携を？」

「そうだな・・・」

しばらく考え込む。いつものように連携を詰めていってもいいのだが、連携に関してはそこそこ満足の行くものになってきている。それよりも問題なのはニーナ自身の戦闘能力だ。

レイフォンは強い。それもとんでもなく。そんなレイフォンとの連携を成立させるには、ニーナが強くならなければならない。今はレイフォンが実力を落としてくれているが、ニーナはより高度な連携を望んでいる。それを実現させるにはやはりニーナでは力不足だ。

せっかく身近にとんでもない強さを持つレイフォンがいるんだ。レイフォンを見て、わたしはもっと強くなりたい。学年や歳の差なんて関係ない。レイフォンはわたしよりも強い。自分よりも強い者に教えを請うのは当然のことだ。

「決めたぞ、レイフォン。今日の訓練はわたしと組み手だ」

「組み手、ですか？」

「ああ、組み手だ。しかし、普通にやっては実力差がありすぎる。そこでだ、レイフォン。お前には、錬金鋼なし、攻撃なしで戦って

もらう。
時間は5分間。そのあいだにわたしが有効打と呼べるものを入れることが出来ればわたしの勝ち。出来なければお前の勝ちだ」
「えーっと、剄は？」
「もちろん使っていいぞ。しかし、衝剄を使う場合は防御のためだけだ。いいな」
「はぁ・・・」
なんとなくやる気なさげなレイフォンは置いといて、フェリに声をかける。
「なんですか？」
「フェリには時間を計ってもらいたい。ロッカールームに時計があるが必要か？」
「いえ、大丈夫です。体内時計で正確に計れますから」
「そうか。では5分間だ。頼んだぞ」
レイフォンに向き直り、錬金鋼を復元する。対するレイフォンは、剣帯をはずし、無手で構えている。
「いくぞ」
脚に溜めていた剄を爆発させる。

内力系活剄変化―旋剄―。

瞬時にレイフォンとの距離が縮まる。未だに動かないレイフォンの左肩に右の鉄鞭を叩きつける。

しかしニーナはその感触に舌を打つ。それは人間を叩いた感触ではなく、鋼鉄などのとても硬いものを叩いたかのような感触。手首を返して衝撃を逃がす。

活剄衝剄混合変化―金剛剄―。

活剄による肉体強化と衝剄による反射を利用した高等防御技術だ。

衝剄を放ち、その反動で距離を取る。レイフォンはニーナの衝剄を浴びてもまるで動じなかった。

（わたしの衝剄では牽制にすらならないのか。ならば！）

もう一度、旋剄による攻撃を行おうと、脚に剄を溜め始めた瞬間、レイフォンの姿が掻き消えた。

内力系活剄変化―水鏡渡り―。

「なっ！」

冷静になれ。本当に消えるはずがない。

神経を研ぎ澄ます。

（気配は・・・すぐ後ろ！）

振り向きざまに裏拳の要領で鉄鞭を振る。レイフォンはしゃがんでそれをやり過ごす。回転の勢いをそのままに、ニーナは回し蹴りをレイフォンの後頭部に向けて放つ。

活剄で強化し、衝剄を乗せた蹴りを、レイフォンは活剄で強化した右手だけで止めて見せた。

ニーナは一旦距離を取るために後ろへ飛ぶ。そして着地の瞬間、溜めていた剄を爆発させてレイフォンのもとへと跳ぶ。

双鉄鞭による乱舞。金剛剄で弾かれればその勢いを、足さばきでいなされればその勢いを利用して次なる一撃を放つ。

「はぁぁぁ！」

一瞬だけ見えたレイフォンの隙。思い切ってそれに飛びつく。

「5分経ちました」

鉄鞭がレイフォンの背中を打つ直前、フェリにより終了が告げられた。だが鉄鞭は止まらない。止めれない。

当たる！

そう思った瞬間、レイフォンの手が鉄鞭を掴んでいた。

「あの隙は、わざとだったのか？」

そうでなければ鉄鞭を止めれるわけがない。

「はい。わざとですよ」

なんのことない、というようなレイフォンを見て改めてレイフォンの凄さを知る。

そのあとも幾らやってもレイフォンに一撃を入れることが出来ない。

「先輩。そろそろ休憩しましょう」

レイフォンに言われ、ニーナは自分が疲れていることに気づく。

「そうだな。すこし休憩しよう」

壁際に戻って座り込む。とたんに、2本ある小瓶が頭を占める。

「すみません。ちょっとトイレに行ってきますね」

レイフォンが錬武館の奥に入っていく。

これはチャンスなのではないか？

ニーナは、フェリが見ていないことを確認してからレイフォンの荷物へと近づく。そして音がしないようにそーっと瓶を――――。

「何してるんですか隊長？」

「ひゃっ！」

レイフォンが戻ってきた。落としそうになった瓶をかろうじてつかまえる。

「な、何でもない」

その後はとても時間が早く過ぎた気がした。

フェリの部屋にレイフォンが行くと言っていたのを聞いて動揺してしまった。

フェリが帰った後、レイフォンが気まずい空気を振り払うためか、少しだけ全力で動いた。ハッキリ言ってニーナの眼で追える速度ではなかった。

そんなレイフォンを見て、自分がどれだけ出来るか試したくなった。

初撃に全てを賭け、足に錬金鋼（ダイト）に剄を限界まで溜める。

そして、完敗した。

動くことすら出来なかった。

腹部に感触があったのは覚えている。だが、壁に叩きつけられた感触はなかった。これもレイフォンが手加減してくれたからだろう。

レイフォンを帰らせた。

自分ではもう少しくらいは出来ると思っていた。しかし現実は違った。完全にしてやられた。なす術もなかった。

（いつまでもクヨクヨするな、ニーナ・アントーク！これからまた、少しずつ強くなれば良いだけの事じゃないか）

いくらかはすっきりした。流石にあと半日くらいは引きずるかもしれないが、それを糧にしてまた跳べばいいだけだ。

明日、レイフォンと顔を合わせるまでには元のニーナ・アントークに戻らなくてはな。

自分の中で答えが出ると、それまで無視していた問題が見えてくる。

（フェリは、なんの用でレイフォンを呼び出したのか？）

それともう一つ。

（結局、セリナさんに貰ったこの栄養ドリンク。渡し損ねたが、どうしたものか）

捨てるなんてことは出来ない。そんなことをしてはセリナさんに失礼だ。覚悟を決めろ。セリナさんを信じるんだ！

瓶のふたを2本一気に開け、中にある液体を2本分飲み干す。

なんだこれは？初めての感覚・・・めまいが・・・。

ニーナは初めての感覚に戸惑う。一度シャーニッドが調子に乗っ

て、ニーナが2年生のときにウォッカを飲まされた事がある。いまの感覚はその時に似ている。

その頃・・・

「ふふふー、ニーナちゃん。彼にドリンク飲ませたかなぁ～。わたしの作った特性アルコール入りドリンク。あれを飲ませて彼がフラフラになったところで介護すればさらにポイントアップだもんねー」

セリナが身体をくねくねさせながら呟いた一言はニーナには届かない。

デイリー・ライフ　2（後書き）

あーもう！
後半がグダグダ。長くなりそうだから無理やりまとめたらなんだか軽くカオスなことに・・・（汗）
つーか、フェリが何の用でレイフォンを呼んだか決めてないｗｗ（笑ってる場合じゃねー！
まぁ、頑張るしかないよね。。。

短編あるいは番外編のような物　（前書き）

更新が遅れました事をここにお詫びします。

この物語りはオブライエンさんが提案してくださったディック×ニーナの話です。
なお、タイトルにもあるように本編とはまったく関わりはありません。

短編あるいは番外編のような物

「ハアァァア！」

暗い外縁部に裂帛（れっぱく）の気合がこだまする。空気が唸り、軋み悲鳴をあげる。

何もない空間に更に鉄鞭を叩きつける。

（まだまだだ。もっとわたしは強くなるぞ！）

蓄積した疲労を活剄で瞬時に癒す。鉄鞭を握り直したとき、ニーナは視線を感じた。

「誰だ？」

声をかけた瞬間、気配が消える。

「何だったんだ……」

気配があった場所に背を向ける。突如背後で膨大な剄が膨れ上がった。巨大な剄がすさまじい速度でニーナに向かう。

「間に合わ――！」

瞬時に剄を練る。

活剄衝剄混合変化―金剛剄―

肩に重い衝撃が走る――が。

金剛剭でほとんどいなすことが出来た。わたしは強くなってきているんだ！

振り向きざまに襲撃者に鉄鞭を叩きつけ――――ようとして身体が止まった。

そこにしっている顔を見たからだ。

「先輩……」

肩に当てたれた巨大な鉄鞭。その先にある赤髪の顔。挑発的に輝く瞳。間違いなくディクセリオ・マスケインだ。

「よ、久しぶり」

ディックは錬金鋼（ダイト）を基礎状態に戻すと、何を思ったのかニーナの肩に手を回してきた。

「ちょっと、先輩何やってるんですか？」

「いいじゃねえか。そんなことよりも夜のツェルニ散策ツアーと洒落込もうや」

「いや、まだ訓練が終わってないですから」

「固ってーなぁ。そんなんだからアイツと何の進展もないんだぜ」

「なっ！！！」

「機関部清掃のバイトで組んでんだろ？ならもっと積極的にアピールしろよな」

「レイフォンは部下で仲間！それ以上でもそれ以下でもありませんっ」

「むきになって否定しちゃって」

「だから！」

「まぁとにかく行こうや」

なぜこんな事に…。

ツェルニの繁華街とでも言うべき大通りをディックと歩いている。

「へえ、ツェルニも結構変わったな……」

隣を歩くディックが面白そうに言う。

「あの、先輩。そろそろ帰りたいんですが」

「まあまあ、そう言うなよ。夜は長いんだぜ」

「誤解されそうないい方はやめてください」

「誤解するって、何を？」

「もういいです」

この人と話していると疲れる……。

ディックと話す以外に疲れることがある。それは、ニーナとディックを見てひそひそと話しているひとがあちこちにいることだ。

ニーナは小隊対抗戦で顔が知られている。そんなニーナが見たことも無い男と歩いているのだ、それも肩を組んで。目立たないわけがない。

「なかなか居心地がいいな」

ディックもそれを感じているのかそんなことを呟いた。考えている事はニーナとは逆のようだが。

とそこで、ニーナの目に見知った顔が映りこんだ。

レイフォンだ。

向こうもすぐにこちらに気づいたようで、小走りに駆けてくる。

「えーっと……隊長。レウさんから伝言なんですけど」

レイフォンはディックを見て、どうしようか？というような表情を一瞬だけしてから話しかけてきた。

「なんだ？」

「調味料一式が足りなくなったので買ってきて欲しいって」

「レウの奴、自分で行けばいいだろうに」

と、肩に回ったディックの腕が少しだけ震えた。何だと思い、ディックの顔を見ても何の変化もない。

ただの気のせいか？

「それと、追申で、そんなに急いでないからゆっくりでいいよ。とも」

「むっ」

実を言うとニーナは、この伝言をチャンスと捉えていた。これを機に、ディックと離れようと思っていたのだ。

「レウめ、いらんことを」

「それじゃ、僕はちょっと用事があるんで」

「レイフォン」

背を向けようとしたレイフォンを呼び止める。

「なんですか？」

「この状況を見てなにか思わないのか？」

「この状況？」

レイフォンはニーナを見、そしてニーナの肩に手を回しているディックを見て。

「えーっと、強い人ですね」

それだけ言うとレイフォンは走っていった。

「それだけなのか……」

なぜかとても残念な気持ちになった。

それにしても――。

何故レイフォンは「強そうな人」ではなく「強い人」と言ったのだろうか？

確かにディックは「強い人」で間違いない。しかし、レイフォンがディックを見たのはさっきを除けばあの時、ニーナが呼び出してしまったときだけだ。それにしたってレイフォンは忘れているというのに。

「あいかわらず恐ろしいガキだな」

「レイフォンのことですか？」

「ああ。あいつがお前と喋ってる時にちょっと仕掛けてみたんだ。そしたらどうなったと思う？」

そんなことをしていたのか？

（まったく気づけなかった。やはりわたしもまだまだだな）

「どうなんたんです？」

ディックとニーナは歩きながら話す。すでにディックの腕はニーナから外されており、ただ並んで歩いているだけの状態だ。

「負けたよ。俺の放った剄は全部打ち消された。それも、なんとも無い顔でな」

あの時か？ニーナは、ディックの腕が僅かに震えたときを思い出す。

しかしレイフォンは最初に見たきり一度たりともディックの事は見ていないんだぞ？

「だが事実だぜ」

ニーナの考えを読んだようにディックが口を開いた。

「本物の化物だ」

「そんな言い方は」

「だから、前にもいったろ？ああいう、はじめっから強い奴は自分の力をどう使っていいか分からねーもんだ。上手くあいつをサポートすれば他の奴よりはリードできるぜ」

「！」

やはりそうなのか？

薄々気づいてはいた。同じ小隊員であるフェリはレイフォンに好意を抱いているのではないか？と。そして他にも、レイフォンのクラスメートであるメイシェンとかいうあの少女も……。

「だから、レイフォンは部下で仲間でそれ以上でもそれ以下で――」

「本当にそうなのか？」

「むぅ……」

考え込む。マイアスから帰ってきたときに生徒会長に言った言葉。あれは本心のはずだ。何かを考えている余裕はなかった。だからあの言葉に偽りは無い。そう自分では思っている。

ならわたしはレイフォンのことが……。

「おぉっと、そろそろ時間か」

「先輩？」

話しているうちに随分と人気の無いところまで来ていた。おそらく倉庫区のあたりだろうと思う。

「いや、ちょっと呼ばれてな」

「はい？」

「俺とお前はまたどこかで遭うことになるだろ。運命がそうなっているだろうからな。さらばだ、無限の槍衾（やりぶすま）を行く者よ」

「待ってください！」

今になって聞きたい事が溢れ出す。

「イグナシスとは、リグザリオとは、狼面集とはいったい何なんです！彼らの目的は！」

「次に会うときにはあいつとの惚気（のろけ）話の一つくらい用意しとけよな」

「先輩！」

「なかなかに楽しかったぜ。それじゃ、またな」

ディックの姿がぶれたかと思うと、次の瞬間には虚空に消えてった。

「いったい先輩は何をしにきたんだ？」

まったく。

「店はまだ開いているのか？」

レウに頼まれた調味料を買うために都市の中心、商業区に向けてニーナは闇夜を切り裂き跳んだ。

短編あるいは番外編のような物　（後書き）

オブライエンさん。こんな感じでいいでしょうか？
なにぶん、文才のない自分が書いた拙作なので、ご期待に応えられていない不安がありますが……。
もっとレイフォンとの絡みがあった方がよかったかな？

それにしてもディックの喋り方がよく分からないですねw
原作やアニメにもあまり出てこないし…。筆者はまだ聖戦のレギオス読んでないんですよ。
アニメでの声はカッコよかったですね。

デイリー・ライフ　3（前書き）

はい、遅れました。

では本編どうぞっ！

デイリー・ライフ　3

レイフォンは街中を走っていた。

シャワーを浴びて服を着替えて、としている間に結構時間が経っていたのだ。

何の用で呼ばれたかは分からない。しかし、早く行かなければまたフェリにどやされることは間違いない。それだけは勘弁だ。

彼女の住むマンションには何度か訪れたことがある。というか、一度見ればあんな豪華な建物はまず忘れない。記憶を頼りに走っているとその豪華絢爛な建物が見えてきた。速度を落とし、歩いてマンションの入り口まで行く。

「あ、えーっと……」

当然のことながら入り口はロックされている。そして、当然のことながらレイフォンは鍵を持っていない。もちろんフェリの部屋番号も覚えていない。

ツーっと、冷や汗が頬を伝う。そろそろ夏季地帯に到達するはずで、夕方の気温も２０度を下回ることはないのだが、それでもレイフォンは寒気に襲われた。

（まずいまずいまずい！ただでさえ遅れてるのにその上「入り方が分からなかったのでボーっとしてました」なんて事になったら殺されかねない）

割と真剣に自らの命の危機に関して悩んでいるレイフォンに凛とした声が背後からなげかけられた。

「フォンフォンはそんなところで何をしているんですか？」

レイフォンの肩が跳ね上がる。背後を取られた事に気が付かないほどにレイフォンは悩んでいたのだ。

恐る恐る振り返ってみると、

片手に買い物袋をぶら下げたフェリが立っていた。

「いや、違うんですよ。入り方が分からなかったとかそういうのじゃなくてですね」

「……言い訳はそれだけですか？」

「うぅ……」

完敗というのはこういう状況を指す言葉なのだろう。フェリのたった一言でレイフォンの負けは決まった。

「それで、フェリ先輩は何を買ってきたんですか？」

「……」

無言のフェリ。無言なのだが、何故か自分が責められている気がする。

「フェリは何を買ってきたんですか」

「夕食の材料です」

「……なるほど」

フェリの料理の腕を知っているレイフォンとしては戦慄を隠し切れない。またあの混沌とした空間が生み出されるのか、と。

「でもそれなら少しくらい待っててくれればよかったのに。荷物持ちくらいいくらでもしますよ」

「フォンフォンが遅れたから一人でいったんじゃないですか」

（私だって一緒に買い物したかったのに…）

拗ねているのが半分、怒っているのが半分、といった表情でフェリはレイフォンに文句をいう。

「はぁ、すいません」

フェリは最近よく感情を表に出す。小隊の皆といるときはそれ程でもないのだが、レイフォンといるときはさっきのように結構色んな表情を見せてくれる。当初レイフォンが抱いていた印象は「冷血人形」だったのだが、いまやその面影はあまりない。

「何か失礼な事を考えていませんか？」

「はいぃ！？」

核心を突かれて素っ頓狂な声をあげるレイフォン。そんなレイフ

ォンを見てフェリは溜め息を付く。

「もういいです。とりあえず上がってください」

ロックを外してさっさと行ってしまうフェリ。呆けていたレイフォンは、危うく締め出されるところでギリギリ扉の内側に滑り込む。

フェリは無言を通している。心なしか、持っている荷物をレイフォンに突きつけている気がする。ここでレイフォンは先程自分が言ったことを思い出し、

「あの、その荷物僕が持ちましょうか？」

「当然です。これ以上持たされたら筋肉痛で倒れます」

筋肉痛で倒れる人はいないんじゃないかな、と思いつつ荷物を受け取る。

「付いてきてください」

それだけ言うとフェリは歩き出す。なんとなく引っかかりを覚えつつもレイフォンは後ろを歩いた。しばらく歩くと引っかかりの正体が分かった。レイフォンの記憶が確かなら、マンションに入ってからの道順はフェリの住む部屋から反対に向かって歩いているのだ。

「あの、フェリ。これって反対方向なんじゃ……」

レイフォンの言葉に振り向くフェリ。その顔には「黙って付いて来い」と書かれていた。しかたなく付き従う。

「兄と少し喧嘩をしたんです。ですから、あの部屋から一番遠い部屋を借りました。まだ何か聞きたい事は？」

理由を聞くのもなんだかなあ。と思っていたレイフォンに、フェリが自ら理由を話す。

「はぁ……」

喧嘩をしただけでこんなバカ高い部屋をもう一つ借りるなんてレイフォンには理解できない。というか、そもそもフェリと生徒会長の喧嘩が想像できない。いつも沈着冷静なフェリと、いつも沈着冷静なカリアンの喧嘩。本日二度目の寒気に襲われるレイフォン。

幾度目かの階段を上ると、目的の部屋に付いたのかフェリが鍵を取り出し鍵穴に差し込んで回――――せなかった。しばらくの間ガチャガチャと格闘していたが何故か一向に鍵は回る素振りを見せない。

「くっ、たかが鍵の分際で生意気な！」

珍しく語気を荒げ、再び挑戦するフェリ。その姿は入学式のあと、無理矢理武芸科に転属させられて落ち込んでいたときに、何となく訪れた外縁部の近くにある機関部の空気を入れ替える通風孔のような物に向かって叫び蹴りを入れていた姿を彷彿とさせた。

「フェリ、ちょっと……」

「何ですか？いま私はとーてーも忙しいのですけど、それよりも大事な事なんですか！」

フェリは振り返ってレイフォンを見る。頬を高潮させて鍵を片手

に意地になって扉を開けようとしているその姿は普通に見ればとても可愛い。普段がクールなため、今の姿はなお魅せるものがある。ギャップ萌えというやつだろうか？しかし今のレイフォンにはそれは恐怖でしかなかった。このまま鍵が開かなければその怒りは当然レイフォンに向けられる。そのことが分かりすぎるほどに分かる。だからこそ、レイフォンはなるべく早くこの問題を片付けようと、フェリに声をかけた。

「いや、見てて気づいたんですけど、その鍵上下反対じゃないですか？」

今の鍵は、旧式と違って上下の差が非常に分かり難く、先端が細かく加工されている。これは偽造防止の為だそうだが、そのせいで上下が分からないことがしばしばあるのだ。

「そんなこと――――」

フェリは文句を言いつつも、レイフォンの言ったとおりに鍵を上下反転させて差し込む。

ガチャリ

そんな音を立てて扉が開いた。

「わたしは上下反対も試しましたよ」

「それは、きちんと奥まで差さってなったんじゃ……」

開いたはずのに、何故かフェリはレイフォンを睨む。それも眉間に皺をよせてまでだ。

「分かっていたのなら何故教えてくれなかったんです？もしかしてフォンフォンはＳですか？それもドのつく」

「違います！」

大いなる誤解を一瞬で否定する。鍵のこともさっき気づいたばかりなのだ。

「この際フォンフォンがＳかＭかは置いといて、とりあえず入ってください」

置いとかないでください！と言いたかったが、それを言うと面倒なことになるのは火を見るよりも明らかだ。わざわざ不毛な口げんかをする気もない。というか勝てる気がしない。

玄関をくぐる。前にも見た豪華な内装が目に入る。

「うわ……」

無意識の内に声を上げるレイフォン。やはり何度来ても慣れそうにない。しかし、最近引っ越したためか、生活感がない。

「なにをしているんですか。はやく来てください」

さきに上がっていたフェリがレイフォンを急き立てる。

「あ、すいません」

律儀に靴を揃えて上がるレイフォン。そんなレイフォンを見てま

たフェリが溜め息を付く。

「ところで……、何の用ですか？」

買い物袋を持ってキッチンに向かいながらレイフォンが聞く。

「それは、その……フォンフォンに、その――り、料理を……」

「？すみません。良く聞こえなかったのでもう一回言ってもらってもいいですか？」

袋をガサガサと漁って冷蔵庫に収めていたため、フェリの小さな声が聞こえなかったのだ。

「ッ！」

バシッ、と袋の中身に気を取られていたレイフォンの背中にフェリの蹴りが綺麗に決まる。

「ふぐっ！？」

床に顔面を押し付けるようにして倒れるレイフォンに一瞥をくれると、

「料理を教えてくださいと言ってるんです」

横腹にガシガシ蹴りを入れながらレイフォンの頭上に罵詈荘厳を浴びせかける。

（フォンフォンのくせに！フォンフォンのくせに！！フォンフォン

のくせに！！！）

流石にブーツを履いていないと指先が痛い。１０回ほどレイフォンを蹴り続けてやっと止まるフェリ。

「準備してきます」

そういい残し去っていくフェリ。扉が閉まる音を聞いてレイフォンは考える。

（フェリが料理を教えて欲しい？それも僕に？）

謎を残しつつもレイフォンは食材を全て冷蔵庫に収める。その後に買い物袋をきっちりと畳んでフェリを待つ。

この紙袋、強度がありそうだから貰って帰ろうかな。などと貧乏人丸出しの事を考えているとフェリがキッチンに入って来た。先程いっていた準備とやらを終えて――。

「フェリ？」

フェリの準備。それは私服にエプロンという、極めて普通のことだった。エプロンの模様を除いては――――。

ミスツェルニの着るエプロンは、淡いピンクを基調とした生地に濃いピンクのハートが散っていて、胸の所には一際大きなハートが堂々と咲き誇っている。尚且つレースのフリフリなどが所々にあしらわれている為、この都市を治める会長なら軽く昇天しそうなほど可愛い。

もちろん、鈍感総合優勝・鈍感王者・絶対鈍感など、数々の冠を持つレイフォンでもフェリの今の姿が可愛いという事はわかった。なので素直にそう言う。

「えっと、可愛いですよ。フェリのエプロン姿」

レイフォンとしては言葉通りであって、それ以上でもそれ以下でもない。ただ思っただけを言ったまでだ。しかしフェリにはそうは聞こえない。どうしてもそれ以上を期待してしまう。レイフォンが重度の鈍感だとしっていても、だ。

「そ、そんなことはいいですからさっさと教えてください」

電光石火の速さでフェリが顔を背けたため、顔を赤くしているところはレイフォンには見られていない。

（あんなの反則じゃないですか）

「フォンフォンはカレーの材料を持ってきてください！」

こちらに来ようとしたレイフォンを言葉で制す。まだ顔の火照りが収まっていないのだ。

分かりました、と短く応えて背を向けるレイフォンを見つつ、フェリは自分の表情を調整した。

デイリー・ライフ　3（後書き）

フェリ可愛いよフェリ。
なんて、更新が遅れたことを悪びれもせずに思っている駄目筆者です。
→嘘です。反省してます。

やっぱり更新は不定期になると思います。
もし良ければ、これからもこの拙作と駄目筆者をよろしくお願い致します。

デイリー・ライフ　４　（前書き）

諸々の言い訳はあとがきで

ちょっと長めです

タイトル変更しました

デイリー・ライフ　4

「それでフォンフォン。次はなにをすればいいんですか？」

包丁を片手にニンジンと壮絶な死闘を繰り広げていたフェリが額の汗をぬぐい、レイフォンに質問をぶつける。

「えっと、そうですね。そこに僕が剥いておいたイモがありますんで、それを一口サイズに切ってください」

フェリが教えて欲しいと言った料理はカレーだった。いくら料理が出来ないといっても、さすがに何が入っているかは分かるため食材は事前にフェリが用意していたものを使っている。

「イモ……」

以前に、始めてレイフォンに料理をしている姿を見られた記憶でもよみがえったのか、フェリの手には汗が浮かび、必要以上の力が入っているように見えた。

「そう何度も同じ失敗をするはずがありません」

自分に言い聞かせるように深呼吸をしたフェリは水に付けられていたイモを一つ取り出す。まな板の上に置かれたイモはフェリの震える手で危なげに固定される。

レイフォンはレイフォンで肉に少量の調味料で下味を付けたりフェリの切り損じに手を加えたりと、決して暇な訳ではないのだが、

どうしてもフェリの方が気になってしまう。

「……」

無言で包丁を動かすフェリの姿にレイフォンは戦慄を覚える。いままで培ってきた勘が警鐘を告げる。このままにしていてはとんでもないことになると。

「……！」

今のは危なかった。グラつくイモに刃先を取られ、危うく綺麗な指に傷が入るところだった。

（見てられない）

そう思ったレイフォンはイモを固定するフェリの手を上から包み込む。

「まずは半分に切って平らな面を――――固定はこうやって――――」

一通りの動きをフェリの手を持ったまま実演したレイフォンは、すでに切ってある野菜類を鍋で煮込むためにお湯を沸かし始める。

鳴り響く心臓と紅くなった顔を見られないようにとフェリは必死でレイフォンに背を向けていた。突然触れられた手の感触がよみがえる。レイフォンの手は大きく、そして温かかった。

「言われなくても分かっています……」

いつもなら強く言えるはずの言葉も今は全く覇気がない。それを知ってか知らずか、苦笑いを返すレイフォンの姿にも心が躍動してしまう。

（フォンフォンのくせに）

「イモが切り終わったら持ってきてくださいね」

レイフォンがこちらを見向きもせずにそう言う。それが少し悔しくて

「いたっ！　いきなりなにするんですか！」

「なまいきです」

本当に痛そうに、でもどこか優しく包み込んでくれそうなレイフォンの目をみるのが恥かしくなって、フェリはイモに向き直る。

（これを切っている間は余計な事を考えなくてすむ）

そう思い目の前の困難に立ち向かおうとした時

（これはまるで……）

夫婦みたいじゃないですか。

唐突にそう思った。

同じキッチンで同じ一緒に料理を作る。別にそれだけで夫婦というわけではないが、少なくとも何の関係もない男女がすることでもない。

一度始まった思考の暴走は止まらない。止められない。

焦るフェリをよそに、彼女の思考はどんどんと速度を上げていく。

念威操者の訓練はまず自身の感情のコントロールから始める。なぜなら、膨大な情報を一度に扱い、瞬時に使える情報を取捨選択しそれを迅速に伝えることを目的とする念威操者が自身の感情に揺さぶられては、その作業すら満足に行えなくなる可能性があるからだ。

当然フェリもそのくらい分けなく出来るはずなのだが、何故か今に限ってそれが出来ない。とめどなく溢れる思考の波がフェリを襲う。

もはやただの妄想の域に達しているフェリの思考の中でのレイフォンは、常にフェリの側にいてその優しい笑顔を向けてくれていた。優しく抱きしめてくれていた。

「フェリ先輩？」

突如響いたレイフォンの言葉でいっきに現実に戻るフェリ。つい「先輩」と呼ばれたことへの条件反射でレイフォンに蹴りを入れてしまう。

「いたっ！　えっと……フェリ。どうかしましたか？」

「な、なんでもありません」

「ならそろそろイモを入れたいんですけど……」

困った笑いを浮かべるレイフォンを見て、フェリは慌ててイモに向き直る。

自分ひとりではうまく出来る自信はないが、さきほどレイフォンがやって見せたことを再現するだけならフェリにも出来る。

フェリは早々にイモに止めを刺してレイフォンに手渡した。レオフォンはそれを沸騰した湯の中に入れていく。火の通りにくいものから順に、鍋が色彩豊かになっていく。

「あとは火が通った後にルウを入れて煮込めば終わりなんで、フェリはすこし休んでいてください」

「いえ、わたしも残ります。全然料理を教えてもらった気がしませんし。ですから最後まで見てます」

おそらく、フェリに対する気遣いでいったであろうレイフォンの言葉を一蹴する。気遣いそのものは嬉しいのだが、今のこの状況をすこしでもフェリは長く味わっていたかった。

「わかりました。　っていっても本当になにもしませんよ？」

フェリの方を見もせずにせっせとお玉を動かしながら言うその姿に説得力などカケラもない。

「おもしろそうですね。その作業、わたしもやらせてください」

「え？　いいですけど、本当に？」

なぜか場所を譲ろうとしないレイフォンにフェリはムッとしてしまう。

「わたしがやるといったらやるんです」

体当たり気味にレイフォンにぶつかる。さすがにそこまでやるとは思っていなかったレイフォンはよろけて場所を空けてしまう。

「獲りました」

いつの間にかフェリの手にはレイフォンが持っていた物とは違うお玉が握られている。

「……焦げないようにゆっくり混ぜるんですよ」

「分かっています。フォンフォンはすこしわたしのことを馬鹿にしすぎていませんか？」

「そ、そんなことはないですよ？」

「なぜ疑問系なのですか？」

おもわず心の内が出てしまったレイフォンはフェリに指摘され、しまったというような顔をする。

ピーンポーン

突然。

突然キッチンにチャイムが鳴り響いた。

「だれでしょうか？」

訝しそうに首をかしげるフェリ。フェリがこの部屋に引っ越したのは最近のことのうえに、わざわざ家まで来るような友好関係の友人などいない。強いて言うならエーリの名が挙がるが、平常時の彼女にこんなところまで来るほどの度胸があるともおもえない。

だとすれば誰？

そう考えたとき、頭に浮かぶのはとある人物の顔。

（……兄ですか）

誰が来るにせよ、ここに居を構えたことを知っているのは兄だけ。しかしあの兄が、たとえ喧嘩の最中であったとしても、たとえフェリが勝手に一方的に出て行っただけだとしても、あの兄が妹の居場所を第三者に教えるとは思えない。

（つくづく邪魔な人ですね）

「でなくていいんですか？」

「どうせ兄でしょうからでる必要性はないのですが、まあ仕方ありませんね。この状況を見せ付けるのも面白いでしょう」

「えっと、生徒会長なら僕はここで火を見てますね」

「そうですね。絶対に焦がさないように細心の注意をしてくださいね」

エプロンを外して玄関へと向かう。わざとエプロン姿を見せ付けるのも一興ではあるが、人様を迎えるときにエプロンを付けたままというのはフェリとしてもやはりどうかと思う。

一応の用心としてのぞき穴から外を確認する。そこにいるのはやはりカリアンだった。

「今開けます」

かちゃりと小気味のよい音を響かせて鍵を捻る。

異変を感じたのは一瞬。しかしその一瞬が致命的となった。鍵の解かれた扉が強引に開けられる。後ろ手に拘束されたカリアンと武芸者らしき男二人が玄関になだれ込んできた。

「こいつの命が惜しければ金を用意しろ」

(分かり易いですね)

フェリの第一印象はそれだった。二人の男はいかにも落ち零れと言った風貌で、既に勝ちを確信しているのか卑下た笑いを浮かべている。

「まったく。なにをしているのですか」

男達はひとまず無視してフェリはカリアンに質問をぶつける。

「いやそれがね」

フェリにとっての諸悪の根源は苦笑いを浮かべて説明に入る。

「どうも私が出てきたところを襲ってから唯一の家族であるフェリを脅迫し身代金を取る算段だそうだ。あわよくば成績の改ざんも狙っているかもしれないね」

「おいお前。いまがどういう状況かわかってんのか？　てめぇは自分の命の心配だけしてればいいんだよ」

無視されていることに腹が立ったのか、男の内の一人。制服を着たカリアンを拘束している方の男がどすの利いた言葉を吐く。

「こらこら。そんなことを言うと近所に迷惑だろう。それに管理人や周囲の人に聞かれたら都市警を呼ばれるかもしれないよ。

……ところでフェリ。その靴はだれの――――なるほど。おかげで起死回生の一手が打てるかもしれない」

あくまでも冷静なカリアンに業を煮やしたのかもう一人の、パーカーを着た男が復元鍵語を唱えて錬金鋼を復元する。光を伴って現れたのは鋼鉄錬金鋼の細剣。いくら刃引きがされていても、あれで突かれれば一般人であるカリアンはひとたまりも無いだろう。

「殺す。それでもいいのか？」

細剣をカリアンの首に当てて、男は言う。

「残念ながらその人に人質としての価値はありません。どうか自由に殺してください。邪魔者がいなくなってせいせいします。あ、死体は都市外に捨てておいてくださいね。この人の死体なんて引き取るつもりは毛頭無いので」

「ひどいなぁ。でも私もまだ死ぬつもりはないからね――――そうだな、とりあえず。　やめろ！　フェリには手を出すな！」

突然カリアンが叫ぶ。だが男のどちらもフェリには指一本触れてはいない。なのに何故カリアンはこんなことを叫んだのか。

「何をわけの分からない事を。ふん。でも噂どおりの美人だな、会長さんよ。そうだ、金じゃなくてもいいぜ。寝室とそこの妹を貸してくれればそれで開放してやる」

パーカーの男がフェリの全身を下から上へとまるで舐めるように見る。

だがフェリはそれらを全て無視してカリアンの叫んだ意味を考えていた。兄がこういう場面で何の意味も成さない行動を取るわけがない。だとすれば……

（ああ、なるほど）

理解してしまえば簡単な事。フェリの納得と同時に一陣の風が玄関に吹く。それはとても穏やかなものだったが、それだけで全ての事は片付いた。

「大丈夫ですか！」

鋼鉄錬金鋼を破壊し、さらに男二人を気絶させるという妙技を成し遂げたのは言うまでも無くレイフォンだ。

この物件は防音が効いていて、戦闘時ならともかく普段のレイフォンではこの玄関のやり取りは聞こえなかったはず。ましてや会長が訪ねてきてフェリがそれに出たのだから性格上盗み聞きをするとも思えない。

しかしカリアンの叫んだあの声量なら確実にレイフォンの耳にも届く。そしてあの内容だ。レイフォンが出てくるのは自明の理である。

「いや、助かった。ありがとう。礼を言うよ」

「いえ。それよりフェリ先輩に何も無くてよかった」

拘束されていた手をさすりながら笑うカリアンにレイフォンは言葉を返す。

「私の心配はしてくれないのかい？」

「僕に貴方の心配をする義理があると思っているんですか？」

「手厳しい」

「そんなことより」

男達が本当に気絶しているか確認していたフェリは話しに入る。レイフォンの腕を疑っているわけではないが、自分で確認しないと気がすまない。

「そんなことよりどうやったんです？　レイフォンは今日錬金鋼を持ってきていなかったと思いますが」

その言葉通りレイフォンは錬金鋼を持ってきていないし、今も持っていない。持っているものと言えば使っていたお玉くらいの物だが、

「まあ、やろうと思えば素手でも壊せるんですけど。これを使ったんですよ」

レイフォンはそのお玉を少し持ち上げる。

「これに少しだけ剄を流して振ったんです。タイミングと角度と場所さえ間違わなければなんとか出来るんですよ」

こともなげに言うレイフォンに、フェリはおろかカリアンさえも驚いた顔をする。

「調理器具で錬金鋼を破壊するとは。君を転科させたのはやはり間違いではなかったようだ」

「ははは……」

レイフォンとしてはいちいち転科の事を掘り返されては渇いた笑いしか出てこない。

「ところで……」

カリアンが大きな咳払いを一つする。

「どうしてレイフォン君がフェリの、最近引っ越したばかりの部屋にいるのかな？」

顔中で満面の笑みを浮かべながらも、ただ一点、目だけは笑っていないカリアンは汚染獣よりも遥かに恐ろしくレイフォンには見えた。

（はあ……）

人知れずフェリは溜め息を付く。結局自分の思うような展開にはならなかった。

それに

「くわしく聞かせて貰おうか。年頃の男女が同じ部屋にいる理由を。別に私は好き合うのがいけないといっている訳ではないんだよ？ただね、ここが学園都市という性質を持つ以上それなりのモラルというものがあってね――――――であるからして――――！」

諸悪の根源はしばらくここに居るつもりのようだ。

（所詮現実はこんなものなのですね）

つい先ほど助けた人と助けられた人の関係とは到底思えない会話が繰り広げられている（といってもカリアンが一方的に喋っているだけなのだが）のを尻目にフェリはキッチンへと向かった。

（フォンフォンが怠けて焦がしていなければいいですが）

デイリー・ライフ　４　（後書き）

いいわけ始めます
受験勉強してまいた　はい
そのうえ、空いてる時間に話を考えていたわけでもなく（汗）
ですがおかげで第一志望校に通っていました

また忙しくなるので更新は不定期になると思いますが、それでも頑張って続けていきたいと思いますので応援よろしくお願いします

デイリー・ライフ　5（前書き）

今度はニーナが主人公です
廃貴族とか諸々のことはとりあえず置いとこう。うん

デイリー・ライフ　5

心地の良い風が芝を揺らし、適度に降り注ぐ陽光が辺りを優しく包み込む今日は、夏季帯に入りかけている今のツェルニではなかなかに恵まれた天候と言える。小鳥のさえずりや遠くから聞こえてくる生徒の会話が丁度いい雑音となって耳に滑り込み眠りを誘う。

いっそこのまま寝てしまおうか？

そんな誘惑がちらつき、思わず大きな欠伸をしてしまう。

しかたない。昨日は機関掃除のバイトが入っていて、あまり眠れていないのだ。

そういえば。と、半分眠った頭が何かを思い出す。

バイトでいつも組んでいる相方の少年がとても疲れた表情していた。

なにかあったのだろうか？

彼のペースが普段よりも遅かったために自分の労働が増えた。なんて言い訳はしたくない。だからただ純粋にパートナーの心配をする。

そろそろ危険なところまで来た睡魔の波が、こんな所で寝てはいけないという最後の意志を片端から屠っていく。

もうこれ以上は。

すぐそこまで迫った眠気に白旗を上げようとした時、

「あれ、隊長？」

バイトの時にも何度か聞いた、少々気の抜けた声が頭上から降り注いだ。

自分の名を呼ばれたわけではないが、この声の主がこの名称を呼んだ場合は、相手は自分しかいない。

全身に纏わりつく眠気を振り払ってニーナは上体を起こす。先ほど心配した少年が鞄を提げてこちらを見ながら立っていた。

「どうした、レイフォン。何か用事か？」

ついそう返してしまってから少し反省する。まだ脳が起ききっていない。まるでこれでは用事がないと話しかけてはいけなと言っているようなものだ。

レイフォンの周りにいつもの三人がいないことに気づいたが、わざわざニーナが聞くようなことでもない。

「ああ、いえ、用事とかじゃなくてですね、ただこんな所で隊長が寝てるのが珍しいなと思いまして」

「む」

確かにニーナは、こういう行動を良しとしない。しかし自分の考

えを曲げそうになるほど、学業やバイト、それに訓練で思った以上に疲れていたらしい。昼休憩を利用して休んでは見たものの、疲労の蓄積でああなってしまった。

「まあ、確かに気持ちよさそうではありますけどね」

そういってレイフォンは持っていた鞄を置いて、ニーナの隣に座った。

ニーナはその距離感に表には出さずに焦りながら、それを取り繕うように関係のない話題を振る。

「そ、それはともかく、昨日はやけに疲れているようだったが、大丈夫なのか？」

何気に聞きたかったことを聞けたことと、それをレイフォンがあまり不審に思ってい無さそうなことを確認してニーナはホッと胸を撫で下ろす。

「昨日って言うか一昨日なんですけど――――」

「まったく、生徒会長らしいな」

レイフォンの話を聞き終わっての、それがニーナの感想だった。若い男女が一つ屋根の下でどうだのや、誘われたからと言って簡単に女性の部屋に入るのはどうだのと、他にも言いたいことはいくつかあったがそれらは何故か上手く言葉としてまとまらなかった。なにか別の、個人的な感情が邪魔をしているような気もするが、ニーナにはよく分からない。

そのため出て来た感想がそれだった。

「時にレイフォン。どうせなら私にも料理を教えてはくれないだろうか？」

突然、そんな言葉が口をついて出た。

「あ、いや、別にそういう意味じゃなくてだな、やっぱり少しくらいは料理も出来ないと、あの、なんというか」

慌てて言葉を足すがもう遅い。一度だした言葉は戻すことが出来ない。

フェリへの対抗心？

ニーナの中に常にある冷静な部分がそう判断をだす。

そんな馬鹿なことがあるか。何度も、主にディックに言ったことだが、レイフォンは部下で仲間。それ以上でもそれ以下でもない。……はずだ。

だったらなぜ？　しかし現実はニーナに考える時間をくれはしなかった。レイフォンが先ほどのニーナの頼みにＯＫを出したのだ。

「別にいいですよ。あ、でもキッチンはどうしようかな。うちの寮のはそんなに大きくないし」

「そ、それなら私たちの寮のを使えばいい。食材は帰りに買えばいいからな」

とっさに言ってしまってから気が付く。これでもう本当に後戻りが出来なくなったと。

「それなら、そうですね。じゃあ今日はどうですか？　訓練も休みだし、どうせなら一緒に買い物してそのまま隊長の寮まで行きますけど」

「そこまでしてもらう訳には。……いや、確かに効率はいいんだろうが」

効率を考えるならそれが一番だ。いささか急な気もするが、今日は珍しくバイトも訓練もないフリーの日。それを逃せばまた訓練やバイトで空く時間は少なくなる。

「なら、そうだな。とりあえず授業が終わったら錬武館に集合にしよう。細かい事はそこで決めればいい」

そろそろ昼休憩が終わるため立ち上がろうとして触れ合った肩が、今更のように二人の距離感を再認識させる。

ニーナは頬が熱くなるのを感じて、しかしどうしていいのかも分からずにレイフォンを見る。

だが当のレイフォンは、まるで肩が触れたことすら気付いていないようにボケーっと景色に見入っていた。

「……レイフォン。そろそろ戻らなくてもいいのか？」

何故かトーンダウンした声の質問をぶつけられたレイフォンは、

それでようやくニーナの方を向く。

「ええっと、武芸科は一つ授業が空いて、その後に組手の実習になるからしばらく暇なんですよね」

「……ふむ。その実習は上級生が入ってもいいのか？」

レイフォンの言った言葉に対して、ニーナは若干の期待を込めて質問した。久しぶりにレイフォンと一対一で戦ってみたくなったのだ。近ごろはシャーニッドも真面目に顔を出すようになって、訓練は「小隊」の強化が中心となってきている。そのためレイフォンに見てもらっていた時間がほぼなくなってしまった。

だからこそこういう機会は逃したくない。

「あ、いえ。一年生だけです。なんでも、実力が拮抗した相手とやるのが一番成長するからとかで」

「……そうか」

それなら仕方がない。そう納得しかけたところでニーナの頭を疑問がよぎった。

実力の拮抗した相手？　たとえ剄を使わないとしても、ツェルニでレイフォンと並べる者などいるはずがない。強いて挙げるなら、ヴァンゼやゴルネオだが、それとて単騎で老生体を相手に勝てるとは思えない。

「僕の相手は多分ナッキになるんじゃないかな？」

ニーナの疑問を知ってか知らずか、どこまでも平和そうな顔でレイフォンが言った。

「まあそうだろうな。恐らくだが、一年生では彼女が一番動けるだろうからな」

戦闘時とはまるで違う緩んだ顔に、教室へ向かうため背を向けた状態でニーナは言葉を投げる。

「相手に怪我をさせるなよ」

背後ではもう一度レイフォンが芝に倒れ込む音がしたが、ニーナは振り返らない。すでに頭の中では次の授業のことを考えている。そしてその隅の方で、料理を教えてもらう約束を取り付けた放課後のことを考えていた。

「思ったより遅くなってしまったな」

ニーナはそう呟きながら早足で錬武館へと向かっていた。

今日最後の授業の担当をしてくれたアンナという上級生は、教え方は上手いのだが声が小さいのでよく質問が入って授業が止まるのだ。

錬武館の、十七小隊にあてがわれた空間についたころには一年生が授業を終えてから二十分は経ってしまっていた。

「遅れてすまない」

声とともに入った部屋にはレイフォンの他にもう二人いた。
べつに怪しい人ではない。ニーナもよく知っているハーレイとフェリだ。ハーレイが持ってきた幾つかの錬金鋼をレイフォンが振り回し、フェリがそれを興味無さそうに見ている。

「あ、隊長遅かったですね」

「ああ。授業が遅れてな。……ところでハーレイ。それはなんだ？」

ニーナが指したのは全部で四つある錬金鋼。色を見る限りでは、おそらく青石、碧宝、紅玉、黒鋼だ。

もしかしてまた……。

そんな危惧が頭をよぎった。この三人の組み合わせは以前も見た。ツェルニが老生体に近づいた時、それに対処するために生徒会長が集めたメンバーだ。

「ああ、大丈夫。前みたいにレイフォンに出張ってもらわなきゃいけないなんてことはないよ。単純に、レイフォンは色んな武器を使えるから錬金鋼の実験にもってこいなんだよね。あ、次これお願い」

「わかりました」

ハーレイが差し出した黒鋼錬金鋼を受け取って復元するレイフォン。現れたのは大きな斧。ハーレイに言わせればスタンハルバードだそうだ。

「ふっ！」

レイフォンが錬金鋼を振るたびに、その重量ゆえか錬武館が震えた。一通り確認したのか、レイフォンは最後に上段から振り下ろし、床ギリギリで止めて見せた。

「いや～、凄いねぇ。どうせならニーナと模擬戦やってみてよ」

「はい？」

「や、だからね、ニーナと模擬戦をやってみてって」

屈託なく無邪気に言うハーレイに悪気はない。レイフォンは困り顔で突っ立っているが、この際レイフォンの事情なんて関係ない。

「よし。やろうかレイフォン」

「ええ！？　隊長まで何を」

「ハーレイ、開始の合図を頼む」

ここまで事がすすんでようやくレイフォンの方も腹を括ったのか、仕方ないなというような顔をしつつもニーナに相対した。

ハーレイの合図を待たず、ニーナの感覚は研ぎ澄まされていく。戦うからには全力を出さなければばらない。それがニーナの考えだ。対するレイフォンはというと、両足を肩幅よりも広く開き、斧を正面に構えている。

「はじめ！」

合図が聞こえたと脳が理解した瞬間、ニーナはレイフォンの眼前に躍り出た。持っているのが剣なら軽くいなされて終わりだろうが、今レイフォンが持っているのは重く、どうしても初動が遅くなる斧だ。初撃に全てを懸けて打ち込めばあるいは。

レイフォンが動くそぶりはない。始まる前から想定した通りの場所――レイフォンの右肩に右の鉄鞭を叩きつける。

「なっ！？」

レイフォンにあたる前に鉄鞭が弾き返された。手応えは、そう。金剛剭を打った時のような手応えだ。しかし、あれは強いて言えば絶対に攻撃を通さない鎧を着るようなもの。さっきのは、明らかに何もない空間で鉄鞭が止められた。

だが驚いている暇はない。全力の攻撃を止められたのだから、当然すぐには硬直は解けない。そして、それだけの時間があれば容易に攻撃を叩き込むことができる。

今のニーナの位置はレイフォンから見て斜め右だ。その位置をもっとも簡単に攻撃できる軌道で斧が迫る。すなわち、レイフォンから見て左下から右上への逆左袈裟切り。

「く……っ！」

刃引きされているとは、いえ重さが重さのためただで済むわけがない。

――間に合え！

そう念じて練った剄は、何とかギリギリで技を形作った。

衝剄活剄混合変化、金剛剄。

ドン、と大きな衝撃を腹部に感じつつも、ニーナは防ぎ切ったことを実感する。が――、

振り上げられた斧の刃先が返り、衝撃で飛ぶニーナを追撃してきた。もう一度、と剄を練るが、さっきのように上手くいかない。それどころか、活剄の強化すらも薄れている。

ニーナの中で何をされたか分からない恐怖よりも、目の前にある恐怖――斧による追撃が勝った。なんとか体を捻って鉄鞭を交差させる。

直後、先ほどとは段違いの衝撃がニーナを襲った。活剄による強化がなかったせいか、ニーナの体は簡単に吹き飛ばされた。

「く、あっ」

着地をしようにも、受け止めた衝撃で自由に動かない。あと数瞬で壁に激突してしまう。

もともと頑強にできている武芸者だが、これは病院に行く怪我になるかもしれない。とニーナがまるで他人事のように考えていると、少なくとも骨折はするはずだったニーナを誰かが受け止めた。

誰だ、と考えるまでもない。シャーニッドが途中参加でもしない限りこの場で受け止める事が出来たのは一人しかいない。

「助かった」

「いえ、ちょっとやりすぎましたし」

吹き飛ばしたくせに受け止めた張本人であるレイフォンはばつが悪そうに言ってニーナを下した。

「ところでレイフォン。あれは一体何なんだ？　何もない所で攻撃が止められたり、途中から技が、というか剄が使えなくなったのは」

レイフォンに抱きとめられたのを今更のように理解したニーナは、気恥ずかしさを隠すために質問をぶつけた。

「えっと、まず、攻撃を止めたのは金剛壁という技で、言葉通り金剛剄の壁を作る技。隊長に教えたやつの進化版です。

そして、剄が使えなくなったのは、鎧崩しという技です。これは、簡単に言うと浸透打撃の応用で、武器の重さを利用して全身に剄の通りが悪くなるように変化させた衝剄を叩き込んで活剄を使い辛くさせたうえで、すぐに衝剄を絡ませた2撃目を打ち込むという技です」

説明されてもよく分からなかったが、ようするにレイフォンは凄いということは分かった。本分は刀のはずなのに、レイフォンはニーナなの知る限り殆どの武器を並み以上に使いこなせる。

「凄かったね、今の試合」

そういって出て来たハーレイの手には2つの錬金鋼が持たれている。

「じゃああと2つだけ試してほしいんだけど」

目がいつもの5割増しで輝いているように見えるのは気のせいだろうか。

こういう時のハーレイは好きにさせるのが一番だ。ニーナは幼馴染として、レイフォンは短いながらも経験則でそれを知っているので、どちらともなく苦笑いを浮かべた。

（こいつのが終わった買い物に行こう）

目でそうレイフォンに告げると、気付いて頷き返してくれた。

「こんどはコレなんだけど」

ハーレイに手渡されてレイフォンが復元したのは青石錬金鋼の鎌だった。

「ニーナも頼んだよ！」

全てが完全に少年のそれになっている幼馴染を見てため息をつき、今度は鎌を持つレイフォンに向かってニーナは飛び込んだ。

デイリー・ライフ　5（後書き）

更新するたびに言い訳してる自分が情けない

次からニーナが料理を教えてもらう予定

ほんとは買い物だけでも済ませたかったのにな……

相変わらず、忙しいわけでもないのに更新が不定期すぎるな

デイリー・ライフ　6（前書き）

前略

ということで本編どぞ

デイリー・ライフ　6

「すまないな、ハーレイの奴に突き合わせてしまって」

隣を歩くレイフォンにそれとなく話しかける。付き合わせた、と言っても、後半はほとんどニーナの言うようにレイフォンもハーレイも動いていたので、半分ほどはニーナが悪かったりするのだが、本人は全く自覚していない。

「……はあ」

あれしきのことでレイフォンが疲れるわけがないのだが、何故か覇気のない返事をするレイフォン。

（まあコイツはいつでもこうだからな）

若干どころか多分に失礼なことを胸の内で発し、ニーナは歩く速度を緩める。

「疲れたのなら明日にするか？」

訓練がないからと言う理由で今日を選んだはずなのに、どういう巡り合わせか本気の組手をしてしまった。そのせいで多少なりとも無理をさせているなら、少しくらいの延期程度、いくらでも都合をつける。

「あ、いえ、疲れてはないですよ……」

ハーレイに錬金鋼に関してドカドカ質問され感想を言わされ、ニ

ーナにはもう実験が終わったのになんども組手に突き合わされて、精神的に少しキているだけだ。

しかしそれとこれとは別の事。あの時のレイフォンがニーナとハーレイに付き合うと決めたのだから後悔はしてない。

「……？　ならいい。じゃあこのまま買い物に行くぞ」

「ところで何を作るつもりなんですか？」

「決めていない」

「そんな堂々と言わなくても」

しかし決めていないのは事実だから、それを隠しても意味がない。とはニーナの持論だ。

ともあれ二人は商業区の安い食料品店に入って行った。

「隊長、カレーにしませんか？」

とくに意味もなく食材を眺めていたニーナにレイフォンが声をかけた。別に作者が楽をしようとしているとかではなく、ふと思いついたのだ。

「カレーか。……ふむ」

手軽に作れるらしく、本で見る限りでは栄養素のバランスもいい。

「よし。ではそれで行こう」

決まればニーナの行動は速い。基本的な材料を買い揃え、他に必要なものをレイフォンに聞いて籠に入れる。

ありがとうございましたー。という軽快な声を背に受けて店を出たときにはすでに日は傾きかけていた。

「これだとあんまり手間はかけられませんね」

レイフォンはそういって何かを考え始めた。おそらく調理の短縮や工程の取捨選択をしているのだろう。そしてニーナはと言えば買い込んだ食料を両手にぶら下げている。これはニーナが頑として譲らなかったためなのだが、

（普通は逆だろう！）

自分自身が上流階級出身のためよくは分からないが、普通は男が荷物を持ち女が献立を関会えるのが、ニーナの中での一般常識だ。

（いや、しかし私とレイフォンが？）

夫婦、というのはうまく想像できない。それに身分や年齢上結婚できる歳ではない。

だとすれば

恋人

（いやいやいや、それはあり得ないだろう！？）

全力で否定する。ちらりとレイフォンののぞき見ると、まだ献立を練り直しているようで、ぶつぶつ言っている。

いまの自分たちはどう見えるのだろうか。

二人の歩く方向は一緒で、決して無関係な人同士ではありえない距離で並んで歩いている。

（しかしそれだけで恋人というのも……）

「ところで隊長はカレーを作ったことがありますか」

自分でもよく分からない所に着陸しようとしていた思考が、レイフォンの質問によって絶たれる。

「ないな。食べた事や、作ろうとしたことならあるが、作ったことはない」

「……フェリ先輩と同じか」

またあの精神的拷問が来るのかとレイフォンは肩を落とす。フェリよりかは幾分マシかもしれないが、本人が料理は出来ないと言っている以上楽観はできない。

「何か言ったか？」

「いえ、なにも」

「……まあいい。レイフォン、電車を使おう。食材が痛んでもいけないしな」

「わかりました」

自分で飛んだ方が遙かに早く着く気もするが、それだと別の意味で食材が痛んでしまう。

そんなくだらなくはあるが、空っぽでもない会話をしているとニーナの住む寮が見えてきた。

相変わらず駅から遠く、周りに何もない寂しい場所であるが、今のレイフォンには魔王の住む城に思えて仕方がない。

とはいえ何度か来てはいるので、それほどの躊躇もなくニーナの後に続いて寮に入った。

「ふむ。他の住人はそれぞれの理由で帰ってこないから作るのは二人分だけでいい」

大き目の、綺麗に整理されたキッチンで食材を並べているレイフォンにそう声をかける。

レウはレポート。セリナは怪しげな研究で今日は帰ってこない。

「あ、いえ、二人分作るのもそれ以上作るのもそんなに変わりませんし、いっそのこと作り置きしてれば朝とかも楽ですよ」

「むう……。私はその辺はよく分からん。お前に任せる」

事実、キッチンを使っているのは専らセリナと、たまにお菓子を作るレウだけで、ニーナは全くと言っていいほど調理に参加したことがない。

「じゃあ、まずは野菜とかの下ごしらえからしますから、僕の真似して切っていってください」

そう言ってレイフォンは器用にイモやニンジンの皮を剥いて小口切りにしていく。

（……まずは難易度の低いニンジンからだな）

ピーラーを片手にニンジンと向き合う。レイフォンは包丁で流れるように剥いていたが、ニーナには到底できない。

（許せ！）

よく分からないスイッチが入ってきたニーナは、レイフォンのするように全ての食材に刃を通していった。

さて、ここでもレイフォンは精神的に苦痛を強いられていた。やはりフェリよりは危なっかしくはないが、その代わりにニーナは武芸者であるという事実が付いてくる。

念威操者も武芸者ではあるが、本職の武芸者は膂力がまるで違う。いつ緊張の糸が切れてその力を出してしまったらと思うと料理どころではない。

以前レイフォンがやったように、使えるものが使えば例えおたまであろうと錬金鋼に勝ててしまう程の威力は出せる。少しでも剄を

包丁に纏わせてしまったら台所はとんでもない事になってしまう。
そうならないよう出来るだけ簡単な作業をニーナに回し、何かあった時は瞬時に動けるよう活剄で身体を満たしてレイフォンは調理していた。
（こんな疲れる料理は初めてだ）
フェリの時も十分すぎるほどに疲れたが、なんというかあの時とはベクトルが違うのだ。
程なくして、キッチンに鼻孔をくすぐる香りが立ち込め始めた。
漏れ出した剄が包丁を発熱させ、肉が部分的に炭になってしまったりもしたが、全体的には滞りなく調理が終わった。
「それじゃあ食べるとしよう。いただきます」
「いただきます」
二人で使うには少々広い食堂で、ニーナとレイフォンは向かい合って食事を開始した。
「ふむ。なかなか上手くいったな。これなら野営でも十分に出来るだろうし……。レイフォンのおかげだ。感謝する」
「いえ、隊長も頑張ってましたよ」

「そ、そうか……？」

「そうですよ」

そこでレイフォンは微笑を浮かべる。苦笑を多分に含んではいるが、なんとか微笑と言っても差し支えはないものに出来た。

ニーナとて褒められて悪い気はしない。照れ隠しのために笑い返すと、そこで会話がいったん終わってしまった。

カチャカチャと鳴る食器が、二人きりであることをニーナに再認識させる。

（いやいや、だからコイツはそういうのじゃなくて！）

ではどんなものか？　と聞かれれば答えることは出来ないが、とにかく「そういうもの」ではないのだ。

「隊長……？」

食べることを止めたニーナに、レイフォンがどうしたのかと覗き込んでくる。

ああ。

そういう気遣いがニーナの心の奥を温め、締め付ける。

ニーナ自身ですら分からない所に、レイフォンという存在は入ってくる。

心のどこからか、今がチャンスだと聞こえる。

だが、何がどうチャンスなのか、やはりニーナには分からない。

ただなんとなく漠然と、このまま終わらせたくないという気持ちは湧いてきた。

「今日やったの模擬戦の事なんだが」

とっさに出たのが戦いの話とは、女の子らしさのカケラもない。だが一度出したものを引っ込めるわけにもいかない。

「よくあれだけの武器を使いこなせるな。普通は一つの武具を納めるだけでとんでもない時間がかかるというのに」

実際に、ニーナも完全に鉄鞭を使いこなせているとは言えない。

「あれは、グレンダンは武芸が盛んですから、色んな武器を使っている人や道場があるんですよ。それで、天剣になってからそういう所を回って勉強しましたから」

先ほどニーナは「普通は」という言葉を使ったが、答えは簡単だ。グレンダンと言う環境と、天剣を取るような武芸者が普通でないだけの事である。まあそれにしたってレイフォンの熟練の速さは他の天剣でも驚くほどではあったが。

「使えない武器とかはあるのか？」

何となく、場繋ぎの感覚で出した質問にレイフォンは少し考えるようにしてから答える。

「そうですね。僕も全部の武器を見たわけじゃないから断言はできませんけど、遠距離武器と、鋼糸とかの特殊な物じゃなかったら大体は使えると思いますけど」

それからした話は武芸的なことが多く、ニーナとしては十分に楽しめたしためにもなったが、これは違うだろう、と、一つの話題が終わるたびに思ってしまうのはどうしても止められなかった。

「それじゃあ僕はそろそろ帰ります」

そう言ってレイフォンは自分のカバンを引き寄せた。もう結構な時間だ。外はすでに暗くなっている。

「ああ。今日は色々と助かった。武芸の話も参考になることが多かったしな」

玄関で言葉を交わす。どうせ明日になればまた錬武館で顔を合わせると言うのに、今日は一緒にいる時間が長かったためか、淋しさを覚えてしまう。

「明日、野外グラウンドを借りて小隊全員で潰しあいをしてみるのも面白いかもしれないな」

「ええ！？」

「たぶん冗談だ」

最初は冗談で言ったつもりだったが、案外良いかもしれない。

「まあいい。気を付けろよ」

言ってから、自分の言葉に内心で笑う。

レイフォンが気を付ける必要のあるものがこの都市にいるはずがないのだ。

だというのにレイフォンは律儀に礼をする。

「また明日な」

「はい」

特に急いでいる訳でもないはずなのに、レイフォンは一足でニーナが目で追えない距離を飛んで闇に消えていった。

その実力を目の当たりにして、改めてレイフォンと言う壁の高さを感じて、ニーナは寮へと戻る。

本人は気付いてなく、指摘しても認めようとはしないだろうが、その口と頬は、小さく可愛らしい女の子の笑いを形作っていた。

デイリー・ライフ　6（後書き）

後半で迷走してしまっている……
まあいいや（ヨクナイケド

次回はメイシェンの予定

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8491m/

学園都市ツェルニ

2011年9月28日14時51分発行